

能動的非行少年のイメージ

——非行理論における「ダメな少年」イメージの転換——

西 村 春 夫

目 次

始めに

I 理論的検討

- 1 イメージとは
- 2 非行少年イメージの内容
- 3 受動的少年イメージと非行理論
- 4 能動的な非行少年イメージの意義
- 5 能動の定義論
- 6 痛快、冒険、快樂追求の観点
- 7 資源が少年に勢力をつけるという観点
- 8 パワー関係から非行をみる観点
- 9 計算的選択理論
- 10 資源と非行の、包括理論化の試み

II 若干のリサーチ

- 11 高校生における非行化の条件としての資源
- 12 青少年の万引きに関する計算的選択
- 13 結論

始めに

非行の少年は人々のイメージのなかにある。人々は彼等をいかにイメージ化しているだろうか。これは非行少年の更生指導の実務面でも、非行・犯罪研究の理論面でも、重要で興味ある事柄である。イメージ化の一つの方向は、規範的、倫理的観点から発するものである。法律や社会のルールに違反したことが強く意識されて、法律やルールからはずれた程度が測られる。この観

点では、終わりに道徳的非難が来ることになる。少年を描く形容として、違反者、無法者、ならずもの、背徳者、冷酷人物、人非人などの言葉が使われる。二つ目は、科学的観点からのものである。心理学、社会学、精神医学などの知識が動員されて、少年の現在までの非行性の発達経過が分析され、非行が根深いものかどうかを検討される。その結果、理解、回復、治療、社会的政策が編みだされよう。青春の過ち、思春期の反抗者、要援助の患者、理解を求める人、無力者、ドロップアウト、ダメなやつ、被疎外者、社会悪の被害者、自立の苦悩者などと非行の少年は表現される。

ところで、本稿は科学的観点に立ち、少年イメージを扱う。科学的観点は非行・犯罪理論の形でまとめられ、学問領域で継承されている。それゆえ、イメージを調べるためには、個々の調査結果としてのデータのみならず、現在までの非行理論も当然検討されることになる。非行理論では、非行の少年はどのようにイメージ化されているのか、そのイメージは一本に収斂されるのだろうか。そのイメージを支持するいかなるデータがあるか。本稿は、前半Ⅰ部で、非行少年のイメージを受動者―能動者の軸でとらえてその意義、問題点を理論的に論じ、後半Ⅱ部で、能動者としてのイメージでとらえる若干の調査結果を筆者の立場から経験的に示すことを目的とする。

Ⅰ 理論的検討

1 イメージとは

イメージは、もともと心理学用語としては、心像、または心象のことである。思い浮べたものであり、感覚とは違うが、感覚に類似した経験である。ある友達のことを思うと、鮮明に顔が浮かび、声が聞こえる場合の顔や声はイメージである。現実にはその人がいない時現れるものであるから、いる時の感覚とは区別され、また、生き生きと鮮明であるので、単なる記憶とは区別される。しかし、巷間、イメージはもう少し広い意味で使われるようである。観念、時には概念（コンセプト）を含むものとして使われる。このように、意味を拡張してまで多用されるのは、イメージという語が、1にソフトな響

きを持つからであり、2にそれが理性的基礎を持たず感性の性質を持ち、浮かんだり、消えたりして、使用者にとって便利だと思われるからである。

ここで、心象と観念について簡単に説明する。若干の人々は非行少年と実際に会話を交わし、感情的交流を経験してきたから、彼等を思い浮かべるのは生き生きとした心象である。街で非行少年を見かけた人も、濃厚な体験として心に残っていれば、心象を持つかもしれない。しかし、多くの人は非行、あるいは非行少年を直接自己の周囲にある事物として経験しておらず、頭で想像したり、思考したりする経験を持つのである。つまりその人々には、非行少年は想像や思考の対象、すなわち、観念であって、生き生きとした心象ではない。研究室でリサーチをしている犯罪学者も然りで、彼等には非行少年は観念として存在する。観念は人によりさまざまに異なると言われる。というのは観念は一人一人により考えられたもの、心理的なものであるからである。これに対して、概念というものがある。こちらの方はより一般的で、論理的であるから、個人差は少なく押さえられるとされる。

ただ、イメージ論の警戒すべき点がある。イメージは作られたものであるから、1、それがどの程度現実と一致するか、2、それが社会的風潮、社会的支配、個人独自の思想、個人の深層心理を反映したものかを見極める必要がある。このことに関連して、犯罪学の分野でヘイガン（Hagan 1988:12）は、ウィルキンソン（Wilkinson 1974）を参照して、1900年代以降のアメリカにおいて、家庭と非行の論議の推移が事実に基づく科学的説明か、イデオロギーの然らしめるものであったかを問うている。

一般の人に非行少年を知っているかと聞いてみるのである。答えに詰まるか、知らないと答えるであろう。その人の現在の環境のなかで直接に知覚していないからである。そういう人にでも、非行少年をどう考えるかと聞いてみるのである。「非行少年は〇〇と思う」とか、「〇〇と考える」と割合楽に答えるのではないだろうか。たしかに、考える人は、その考えの深い、浅いを問わず、観念をもって答えることができるのである。他方、観念を持たない人は分からないと答えるだけである。よくよく深く考えて答えれば、例え

ば新聞論調のコピーのような観念ではなく、その人自身の独自の観念を答えたことになる。また、こう聞かれて、観念でなく心象をもって感覚的に答える人もあるかもしれない。本稿ではすでに述べたように、心象も観念もイメージと一括するけれども、その場合のイメージとは、どちらかというところ、心象よりも観念の要素を多く持つと思われる。非行、あるいは、非行少年について考えた内容と結果を本稿にするからである。そうであれば、観念の語を使うのがよさそうであるが、そうしないのは、専ら語感の問題である。

2 非行少年イメージの内容

非行論議のなかでは、非行の実態や非行の原因が主要なテーマになり、非行少年をどう思うか、つまり、少年イメージのことはあまり正面切って検討されない。もちろん、非行の少年のイメージを明らかにするためにイメージを直接測る質問を構成することはできる。筆者はかつて非行少年の原因論的イメージを調査し、発表したことがある。たとえば、非行少年は自分勝手、気儘にやっているという短文表現は人格特性的な原因をイメージしている。この種の短文を59個示して同意するかしないかを聞き、その結果を統計解析したところ、8個のイメージ類型を抽出することができた（西村1989、50-51）。短文もそのように作られている関係もあるが、そのうち6個はマイナスのイメージで非行の少年をとらえていた。別の1つの類型は少年の勇気、体格の強さ、正直さ、体制変革の意義を認めるところのイメージ（プラスのイメージと言うべきもの）を表していたが、この種プラスイメージの賛成者は少数であった。しかし、少年を否定的、あるいは被害者的にとらえるのと、肯定的、あるいは、積極的にとらえるのとの2本立ての可能性はここに暗示されている。

直接測定によらない調べ方もある。それは今までの非行研究結果、一般社会の非行論調を分析して、解釈するやり方である。そうやって集めた多数のイメージはいくつかに分類して整理することが望ましい。それを生のデータで系統的にやれば、一つのまとまった研究となろう。ここではそこまで行か

ずに、既存の文献参照で整理検討する。イメージは多種、多様である。たとえば、非難に急なる者は人を否定的に考え、回復させようとする者は肯定的にとらえるのは自然の理であろう。そこには人に対する否定と肯定のイメージが潜んでいる。イメージ展開の軸として肯定—否定、積極—消極、能動—受動は考えられやすいものであり、ここでは能動—受動の軸を採用する。次のように整理してみる。

1 能動的非行少年イメージ

このイメージを支える形容語——積極的、活力あり、課題解決指向、追求的、資質あり、意思的、チャレンジ精神の、自立の、有能な、外在的決定論の世界を越えた、自己決定の、創造的（非拘束的、環境に非追従的）

1)（Agnew1989）を参照。

2 受動的非行少年イメージ

このイメージを支える形容語——消極的、無力な、貧窮の、逃避的、劣等失敗者、被害者的、他律の、強制されて、からきしダメな、外在的決定論の世界にとらわれた、

ここで1点注意しておきたい。イメージは人が持った心象、ないし観念であるから、非行少年自身の示す非行行動と一致するか、しないかは別問題である。受動的少年と考えられても、徹底的受動であれば、非行なる行動をやるはずはないし、または、悪友から言われるままに何でもやるような、ロボット人間であるかもしれない。これは極端であろう。実際は、受動と見られても、いかほどか能動が秘められている、あるいは、受動と見られるからこそ、逆に能動が秘められているのかもしれない。

従来の非行研究、世人の固定観念では、上記の2の受動イメージが断然、支配的におこなわれて来た。それが間違っているとは思われないのであるが、はたしてそれで十分であるかという疑問、それが本稿の主題である。少年をとらえる場合、彼等の将来の発達を大人たちがどう支援するかがもっとも大

切なことであると思う。そうすると、意思、意欲の発動が焦点とならざるをえない。もっと、能動に注目すべきゆえんである。

3 受動的少年イメージと非行理論

「受動的」は、内における受動と外に対する受動の2面が考えられる。内における受動は少年の人格、行動特性に見られる受動、消極、依存である。日本では学者、臨床家、実務家はたびたびこのことを指摘して来た。20年前、箕浦・武田は最近の日本の非行少年の最大の問題として、攻撃性向が見られず、主体性とか意志力が欠如していることを認識すべきだと述べた。さらに、彼等の調査対象とした非行少年が少年院生であることを注釈し、従来の少年院では自己の判断と責任でイニシアチブをとる必要はなく、この施設の枠が依存性を助長し主体性を育てないと危ぐしている（箕浦、武田 1972：43）。同じこの論文の同頁では、同一線上の議論として、上芝らの見解も紹介している。上芝らは少年の軟弱化傾向として、「最近の非行少年には以前の ような強靱さや粗暴さが感じられない。——この結果、心情はよくいえば、柔和、悪くいえば、気迫や意志力を欠くようになっている」と言う。森は、最近の少年非行には、発散型のものより、うっ積型の非行が増えているとし、うっ積型の非行者は内向的、友達もなく、こそこそ陰湿だと言う。彼は、さらに、空井の見解を紹介し、日本の非行者は親切で、やさしく、受け身で、気楽に導いてくれるという母のイメージを持ち、アメリカの非行少年では強い敵意が見られるのに、日本では敵意は弱いと書いている（森1978：280-1）。受け身は受動的イメージであるが、親切、やさしい、敵意が能動的イメージに直ちにつながるかどうかは保留しておく。

以上はやや古い所説であるが、新しいところで、鈴木真悟らの不良行為少年の研究を見る。中高教師、少年担当警察官、婦人補導員 762 人に対し、最近の不良行為少年の特徴を尋ねているが、受動に関連すると思われるのは、忍耐力の欠如、無目的性、流されやすい、学習意欲の欠如、仲間外れにされることがの不安などの指摘である（非行原因調査研究会1982：157-8）。受動は

比較的同意しやすい。解答のなかには、能動イメージらしきものも含まれているようだが、それは後で取りあげたい。このように受動的イメージの指摘は随所に見出せるほどである。

次に、外に対する受動に移る。この種の受動は実証主義を掲げる近代の科学的犯罪学における論理そのものである。そこでは個人のコントロールの及ばない原因と、結果である犯罪とを結びつけて、因果の法則を決定論的に明らかにすることを目指す。具体的にいえば、社会や環境条件の、圧力や支配的な影響力に対して個人は自分の意思を確固として表明できず、周囲に気兼ねなく自分の気持ちを表せず、無抵抗、無力、自立の欠如に終始する。ここで描かれる個人は外界の力に負けて無力をさらけ出すのである。この種の受動的個人は、近代実証主義犯罪学の犯罪者そのものではないだろうか。学者は、外界の力を、遺伝因子、社会学的力、無意識の欲動といろいろ置き換えて原因を探求した。

以下、非行・犯罪理論の動向を追いながらこのことを少し詳しくみたい。圧倒的多数の犯罪学者は、上述のように、非行をその個人のコントロールの及ばざるところの原因による結果だと考えて分析を進めて来た。個人が原因を意のままにコントロールできたら、客観的な法則などできるわけがないと考えた。これが近代犯罪学の始祖、ロンブローゾのイタリア実証主義以来続いてきた決定論的な科学的分析法である。ロンブローゾは、個人ではどうしようもない遺伝的原因を世に問うたけれども、現代では、分析の中心は、社会学的、心理学的要因に移っていると思われる。例えば、社会構造論者は青少年の身の回りにあるスラムの社会解体現象、アノミー状況や非行副文化に注目し、人格発達重視の犯罪心理学者は本能的な反社会的衝動、幼児期の家庭の人格形成事情、または、愛情のフラストレーションを取りあげる。こういう現実的社会状況や心理的要因が少年にふりかかり、あるいは、少年をむしばみ、少年は必ずや非行化するという。こういう分析法では、研究者が気づくと気づかないとに関わらず、少年は状況や要因に打ちひしがれる、無力な存在とイメージ化される。かりに少年が街のギャング集団に入って喜ん

でやっていますが、理論構成では、少年は副次文化に染められる受け身の存在とみなされる。一方、社会構造の諸理論が暗示する少年の受動性を批判し、能動的イメージを主張する人は、因果法則の是非には触れず（彼等も科学者であるから、因果の法則を破壊しようとは思っていないのである）、無力な個人のほんろうされる姿を我々に印象づけようと努力する。

社会構造の諸理論の特徴を言えば、喪失の理論である。喪失とは *deprivation* の訳であるが、その意味は、個人が物、地位、能力などを奪われて恵まれない状態にあることである。物が奪われれば、たとえば貧困であり、地位なら、下層階級であり、能力なら、たとえば仕事のできない人である。つまり、少年は奪われて必然の成り行きとして非行に至るとされるから、非行理論では喪失は必然論の世界でもある。たしかに理論のなかで描かれる、個人は無力で、落ちる運命の人であるというのは人を積極的にとらえていない。しかし、特定の社会構造は例外なく少年を非行に落とすという理論的主張は、それが決定論的思考であればあるほど、政策論においては強く社会に訴える力を持つのではないか。そして、アメリカ社会の実態とその矛盾を追求する正義心を強く刺激すると筆者には思われる。

社会構造の諸理論の反対提案として出てきた、コントロール理論ではどうか。スラム地域で非行副次文化が際立つ場所に育っても、すべての青少年が非行に走るとはいえず、普通の青少年も結構いるのはなぜかを問題にしたのはレックレス等であったが、彼が導いた答えの鍵は良い自己概念の形成であった。つまり、いかに悪い環境にあっても、自分はグッドボーイだという自己確信が真実あれば、自身は環境の支配を受けず、非行と絶縁されると主張した (Reckless, Dinitz, and Murray 1956, 1957)。レックレスは、リース、ナイとともに初期のコントロール理論家である。その後、コントロール理論の頂点に立つハーシヒは、はっきり社会構造理論に反対し、社会の下層部の人々が一般社会と異なった生活の様式（それが非行・犯罪的とみなされる）を作りあげているという副次文化的見解を批判した (Hirschi 1969)。自己報告形式の非行調査により、上、中、下層を問わず非行があることを見

出した。それゆえ非行化するのは、上、中、下と分裂化する社会構造のせいではなく、少年に社会的ボンドが欠けているからだと考えた。社会的ボンドは調査によって計量的に測定されるものとして定式化された。

非行に陥るのは環境の悪条件のせいではないというコントロール理論家の主張は、環境に押し潰されて一直線に非行化するというような言い方と異なる。その代わり、惨めな個人を環境から救い出して、環境に対する個人の優位性を強調する主張になるのかどうか。この点はコントロール理論家は明確に言っていないようである。筆者は2つの点からコントロール理論といえども個人を受動と考えているとみたい。1は、自己コントロールの力は社会化という学習によって作られると多くのコントロール理論家は考えるから、依然として社会は個人の上に覆いかぶさる重い存在であって、個人が環境に働きかけるようなものとして構想されているとは認めがたい。そして2は、社会化がうまく行かなければ、どんな個人も内内に持っている反社会的衝動の暴発のなすが儘になるという性悪説に沿った理論構成である。ここでイメージ化されている個人は、外なる社会と内なる衝動という両面に対して無力な存在である。

以上、今までの多くの実証的研究は、暗黙、明示いずれにしろ、個人では意のままにならぬ社会的、心理的原因を探求して来た。裏を返せば、個人は無力で、受動的な存在と考えられたといえることができる。その最たるものは社会構造の諸理論であった。しかし、100% 必ずそうなる原因は見つかっていないから、幸いにも100% 受動的な人間は発見されないで済んでいるが、少なくとも理論上は見つかるはずのものと考えられている。

4 能動的な非行少年イメージの意義

このようにして受動的イメージは盛んである一方、能動的な非行少年イメージ、および、それに合致する理論化は少ない。なぜ能動的な非行、能動的な非行少年を考えにくいのか。まず、それを考えてみたい。

非行の科学は原因と結果についての決定論的な法則を見つけようとして、

様々な原因的条件を調べて来たと言える。その場合いくつかの仮定、前提があったと思う。以下、3個を取り上げる。(1)実証主義的方法では、原因を人間の外部に求める方が作業しやすい。内部の要因を原因とするのでは因果関係がモデル化しにくいからである。原因は外部にあり、それが人間に作用するという図式は伝染病の例からでも思いつきやすいであろう。この場合、人間は外部からの作用の受け手となってしまう、能動者とはならない。(2)結果は非行という望ましくない現象であるから、原因は当然人間や社会の望ましくない特性が関係してくるはずであると一般に思われている。これが社会病理学的発想であるし、まったく外れているとも思えない。裏をかえせば、人間や社会の望ましい特性は非行・犯罪を生むわけではないのである。したがって、能動、自立、積極、正直、誠実、優雅…などの美徳的因子は原因となる余地は始めからなかった。(3)非行防止は社会改良であるという立場に立てば、望ましい特性を原因に持つてくるのでは政策的にやりにくい。確かに犯罪学の100年は資本主義の諸悪の跳梁した時期でもあったから、諸悪を原因と指摘し、美徳的因子は脇に置いておくやり方は時代の要求に叶うことであった。まったく不当ともいえない。

しかし、現代、能動性発掘の理論の必要性がまったくないと言えるだろうか。非行が普通の青少年にも稀有でない一般化の時代であるとする、受動的で、無力で、消極的な少年だけが非行少年なのであるかどうか、疑問とされる。ひょっとすると、能動的で、パワーがあり、積極的な少年も非行と呼ばれる少年のなかにいるのではないかと想像したらどうであろうか。受動的な非行があれば、能動的な非行もあるかもしれない。非行の一般化の時代であれば、両面を見てこそ全体像が捕まえられると考えるのは自然である。

また、能動イメージに引かれるのは、社会構造論のような社会決定論、社会的コントロール理論のような社会優位論に対し、個人の主体を強調するもう一つの理論を求める願望のためでもある。

しかし、能動的な非行少年というイメージ化は直ちに反発を招くかもしれない。法律を犯したものに対して適切な表現ではない、非行を美化し、非行少

年に迎合するものであると反対者は主張するかもしれない。筆者も美化、迎合するつもりはないが、ただ、非行の一般化の情勢にあるなかで、ダメな少年イメージ一本では、現在の非行状況を的確にとらえたことにはならないと考えるからである。それゆえ、ダメな、あるいは、不遇な非行少年という考えをまったく否定する意図ではない。

5 能動の定義論

今までの議論をふまえ能動を次のようにとらえたい。まず、こういうものではないという負の定義から始める。第1に、能動は、欲求不満、ストレス、野心の挫折などの反応として反射的、没主体的に起こる怒り、攻撃、自暴自棄、意地っ張り、うさ晴らしを意味しない。このような場合も一見、積極的な、エネルギー的な行動となるかもしれない。欲求不満－攻撃理論、コーエンの反動形成の理論化はこの線に沿ったものである。しかし、それと能動は混同されてはならない。第2に、不変な性格特性としての能動、創造性ではない。能動は個人が活発に、自主的に動ける状態であり、たとえば、お金を持っているとか、犯罪のコストと利益を打算するなどと定式化される。それゆえ、能動は、人格理論の概念であるより、それをまったく否定はしないが、どちらかというとき社会学的非行理論の範疇にあるとしてとらえる。

次に正の定義に入る。第1に、今まで見て来たように、能動は社会構造理論に見られる決定論的思考法の批判としての意味を持ち、個人の自発を非行要因として重視する。さりながら、自発といっても今までの非行研究をたどってみると、以下、いくつかの分岐が指摘されるであろう。

a. 非行を少年の痛快（fun）、冒険、快楽追求的（pleasurable）とみる観点。非行は痛快だから敢行するのであって、ほかの何物でもないとする。それゆえ、非行に付随する感情体験が痛快、冒険、快楽だというのはない。

b. 少年を資源（resource）を持つ者としてとらえる観点。この場合の資源は、金、財産的な物、友人、体格、などの物質的資源、知力、犯罪知識、創造精神、技能、価値意識などの精神的資源がある。これらの資源は少年を

能動的 (active), 勢力的 (powerful) にし, 非行へと勇躍させる。ここで描かれる非行イメージは貧窮ゆえの非行ではなく, 勢力ゆえの非行である。

c. 非行は, 結果の有利, 不利をみずから計算, 判断しておこなうものであると理論化する観点。古くは, ベンサムなどの古典学派的功利主義的見解はそうであり, その現代版といえる計量的選択理論 (rational choice theory) は, 個人なりの, 犯罪の「つじつま合わせ」の過程を分析する。分析概念としてはその個人なりの合理性で十分であり, 客観的な, 高等な合理性を要しない。この場合, 計算判断過程が自由な意思決定を含むゆえ能動とみなされる。ここでは, しかし, 無意識の犯罪動機は除かれる。上記, b, c の観点は少年のみならず大人のホワイトカラー犯罪の分析にも有効であると思われる。

d. 自分に張られた負のレイベルを積極的に拒否, 返上する非行者をイメージする観点。これは従来のシンボリック相互作用論 (レイベリング理論) における逸脱者の受動イメージ (レッテルを甘受するのみの弱い個人像) に反対して主張される (たとえば, Rogers, etc. 1974)。

e. 非行・犯罪はパワー関係を示すものであるというマルクス主義に立つ犯罪学理論の立場。非行を禁圧され, 罰を受けるのは他人のパワーに従属することであるとされる反面, 非行を持続させるのは他人に自己のパワーを科すことであるとされる (Fagan 1988 b : 15)。これは, 一般原則を述べたまでであり, このままでは具体性に欠ける。フェイガンは別の著述で具体化して述べているが, 後述する。

以上に見るように, 能動はいくつかの分岐にしたがって, 何通りかの内容を含んでいるとみられる。a, b では能動は個性記述的にとらえられており, 残りの c, d, e では非行・犯罪理論に関連して明確化される。この多様さは能動を統一的に把握することを困難にしている一方, 論議を今のところ豊かにしているかもしれない。以下の章節では上記の a, b, e, c の内容が順次言及されるであろう。

6 痛快, 冒険, 快楽追求の観点—能動的イメージの出現—

能動イメージは唐突に出てきたのではない。ロングは過剰社会化という概念を用い、社会の枠組にあまりにも馴化されすぎて個性や独立性を失う過一同調型人間の出現を警告し、自主、自立の人間を構想した(Wrong 1961)。同調型、つまり社会の枠にはめられた人間は人生を積極的に生きないと言える。ロングのすぐ前年に、非行副次文化論の古典たる、クロワード&オーリンの「非行と機会」、同じく6年前にコーエンの「非行少年たち：ギャングの文化」が出ているから、ロングもまさしく古典である。そのロングの見方にたった62年のボーデュアも今や古典である。

ボーデュアは非行副次文化論を批判する。近代の分析家（コーエン、クロワード、オーリンのこと）が、悪は痛快だと仮定するのを止め、ギャング非行は少年が善良を捨てて悪へ踏み込んだ時に起こるものと考えたのはおかしいと言う(Bordua 1962: 301)。このように言う意味は、1920年代と50年代の間に青少年ギャングの実質はさして変化がないのに、ギャング形成と存続過程についての学者の見方に大きな変化があったとのボーデュアの洞察がある。すなわち、シカゴ学派3人組の1人、スラッシャーは、1927年に出版された犯罪学の古典、「ギャング」で、シカゴのスラムで少年たちが警察に追われ、学校を抜けだし、さいころを振り、飲んだくれから盗むのを楽しんでいるように描いた(Thrasher 1927)。30年後のコーエン、クロワード、オーリンの少年たちは恐ろしい経済的、精神的貧困に駆り立てられて非行という反乱に出たのである。スラッシャーはもちろんスラムの悲惨を詳しく描写したし、非行の多様な形態を記述している。しかし、非行を単に悪ととらえず、非行をする時の少年の気持ちの裏に立ち入り、非行は痛快または新経験の探求であると結論した。探求はそれ自体、精神を高揚させるものであり、決してスラムの悲惨の結果ではないのである。かくて、スラッシャーは少年に能動を、コーエン、クロワード、オーリンは受動を与えているというのが、筆者の読み方である。このようにみると、能動的イメージは近代犯罪社会学の誕生とともに古いことになるが、そうまで言わなくとも62年のボーデュアの論文は画期的作品に値する。

ボーデューアの後、同じ線上でいく人かの者が論文を出した。トビーは、車時代の少年にとって車（というリソース）とは、親の目を逃れる手段となり、親子の結び付きを弛めると論じる（Toby 1969）。後述のヘイガンらの主張では、非行は痛快であり、解放精神を含み、冒険機会であり、家族の外で成人男性がやっているのに似た快楽追求の要素を持つとされる（Hagan etc. 1979）。また、リチャーズらは、「遊びとしての非行」のなかで、少年にとって犯罪は愉快的な遊びの型であると述べる（Richards etc. 1979）。

日本では遊び型非行という用語が1970年から警察庁少年課によって使われ始め、79年まで使われていた（西村1989：5）。この用語の概念は学問的にそれほど明確ではなく、そのうちに使用のピークが過ぎてしまった感がある。筆者は今でも十分有効な分析概念であると思うが、それはともかく、過ぎ去ってみると、研究が十分おこなわれたか疑問である。通例の日本における犯罪学的研究と同じく、遊び型非行の研究も実態記述的、言葉の争いの的であって、理論的蓄積を増したことにはならなかった。遊び型とは、使う者によって強調点が異なるが、通常、その非行が軽微で一過的、その非行動機が遊戯的、その少年特性が規範意識の欠如であることを内容とする（平尾1979：88-93）。この遊び型少年を、スラッシャーやボーデューアらにならって、能動的非行少年とすることができかどうかは是非がある。その非行が、行為事態に意味があり、目的的行動ではないという見解はたしかに能動の概念に一致する。しかし、平尾のいくつかの引用文献でみる限り、この時期の日本の遊び型は、1. 暇つぶしのためである、2. 現実逃避と自我拡張という受動-能動の両面的な行動様式を備えている、3. 少年のうっ屈した状態に対する対応形式の一種としての逃避である、4. 社会的未成熟で、自立性、能動性、主体的勤勉性に欠けると説明される（平尾1979：88-93）。このような見解を読めば、スラッシャーの少年ギャングのように悪行を魅力化するバイタリティは認められず、したがって能動的というにはかなり困難がある。

続いて、箕浦らは71年（昭和46年、この2年後に第1次石油ショックが起こる）、明るくて気のいい非行少年というコンセプトを提案して、社会の変

動とともにそれまでの暗い、ひがみっぽい非行少年像を変えようと試みた、（箕浦、武田1971）。昭和40年代初頭には、しつけをしない家庭、物質中心的な家庭生活が一般的になり、知能は普通、神経症的な色彩もなく、低文化性に起因するでもない、不適応型でも、感染型でもない少年が家庭裁判所に多く来るようになったという。こういう少年を著者は明るいと規定する。この少年の明るさは能動の1つの萌芽になり得ると考えるが、他方、明るさの反面として著者は依存的で、欲求不満耐性が低いこと、つまり現実吟味力、環境に対する能動的支配性などの建設的な自我が強くない点を指摘しているから、明るいことが直ちに能動とはいえない。

この節を終えるにあたり、1つの理論に関わる、しかも常識的疑問は、それほど少年にとって非行が痛快至極で、魅力的な活動であるなら、なぜもっと多くの少年が非行をしないのかという点である（Cullen etc. 1985 : 183）。伝統的説明に立てば、社会的ボンドが少年を縛っているから（Hirschi 1969, Toby 1974）、非合法行動に移る機会に恵まれないから（Cloward and Ohlin 1959）である。この論理では、逆に犯罪ができるのは、コントロールが緩み、非合法機会が訪れる時である。果たしてそれだけであるか。ここに少年が今の時代に資源（リソース）を持つ、あるいは得ることの犯罪学的重要性が注目されることになる。次に移る。

7 資源が少年に勢力をつけるという観点—能動理論の展開—

能動的イメージに沿った今日までの議論の展開を後づけると、3つの人物と論文が節目として注目されるであろう。

1. ボーデュア（1961）

ギャング非行の副次文化論的解釈を批判し、「痛快」を主張した

2. カレン、ラーソン、マザーズ（1985）

資源、とくに経済力を持つことが社会的コントロールの力を弱め、非合法な行動をする機会への接近を許すと主張した

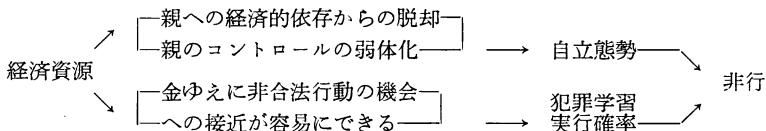
3. アグニュー（1990）

資源（勢力と自立から成る）、能動的非行者の概念を提案し、資源を主要変数にして非行モデルを作成した

この節ではカレンらの主張を参照して資源論を説明する。振り返って、子供が力（資源）をつけてくると何かにつけて親のいうことを聞かなくなるのは誰しも経験する。世間の判断によれば、成功すれば自立、失敗すれば反乱、逸脱とされる。子供が力を持った時、正しい道を行くか、非行の道を行くか、いずれの道もある。親はそのことをうすうす知っていよう。ただ、従来の日常倫理や非行理論では資源を持つことは必ず正しい道を進ませ、恵まれない環境にあって、資源を持たないことは非行の道を進ませるというように、資源と非行を反するものとして定式化しただけである。この考えを廃して、少年が資源を持つことが非行へと導くと考えたらどうかという提案である。

カレンらは従来の社会学的非行理論が階層理論、とくにその少年の親の階層を非行原因としたことに反対する。すなわち、社会には階層があって、その低階層出身者は犯罪を許容する価値意識を継承しているとか(シカゴ学派)、低階層の子弟は欲求不満、野心の挫折などの緊張を経験している（コーエン、クロワード、オーリン）という見解に賛成しない（Cullen etc. 1985 : 172）。そこで、少年が資源（カレンらを取り上げたのは経済的資源、つまりお金や物）をたっぷり持つことが非行に走らせるという説を立てた。この場合、彼等の頭のなかには、低階層で親が貧困の時、子供が非行に出るのは、必ずしも親の低階層ゆえの子の絶望的喪失のせいではなく、子供が頑張って経済的に力を貯めるからだとした（Cullen etc. 1985 : 174）。

自由に使えるお金を持つことがなぜ非行につながるのかについて、カレンら



注：カレンらの叙述を筆者がダイアグラムに作る。

図1 経済資源による非行化モデル

は2つの媒介概念を示す。ダイアグラム風に示す（Cullen etc. 1985 : 183）。

カレンらは少年の財物所有高（単なる小遣いではなく）を調べて、自己報告の非行と有意に関連することを見出した。同じ論文で、就業が非行を促進するというリサーチ（Shannon 1982）を紹介し、また、経済力を持つ人生時期が問題で、親への依存を早く離脱しようとするのが、適切な就業に至るか、非行犯罪に至るかで分かれ道があるという見解（Growley 1981）を参照している（Cullen etc. 1985 : 185）。日米ともにそうだと思うが、就業が非行防止になるという考えは、失業が非行に走らせるという喪失論的原因論の裏返しを行く政策提案であるが、細かな分析を要するのである。人生の早くからの自立指向が犯罪化につながるという研究結果は日本にもあるところの留意すべき所説である（沢田 1986）。

日本で警察官と最近の非行の少年との、原因をめぐる会話をある学生は次のようにリポートしている。

—なぜ自転車を盗んだのですか。

「別に何となくです

—学校や両親に知れてよいのですか。

「それは困るけど、親は何もいわないし、学校を退学になっても、仕事をしますから

—学校中退、しかも悪いことをしてやめた人間を会社が使ってくれますか。

「大丈夫です。僕の友人も中退して、ちゃんと就職している人も結構いるし、だめでもフリーアルバイトにでもなります。

—フリーターで生活できると思うのですか。

「できますよ。今、時給もいいし、別にお金をためる必要もないですから

—いざという時はどうするのですか。

「そのときはそのときで何とかします

—何とかならなかったら。

「大丈夫だって……

以上の会話で、親、学校のコントロールは大したことはないと言われ、少年には認識されている。このコントロールの低落は何に起因するかというと、この応答からみる限り、中退しても就職できるという見通しの知識、いざとなっても必ず何とかなるという経済的自信（経済的パワー）、つまり、資源を持っていることによるのではないだろうか。これは日本の今の青少年の1断面である。前出、箕浦、武田の論文では、30年前の昭和46年の日本社会の状況として、少子家庭の出現、過保護な養育態度の一般化、大衆消費時代の到来（万事お金の世の中）の3点が指摘され（箕浦、武田 1971：225）、それとあいまち、しつけをしない家庭、物質中心的な家庭生活が少年の依存と耐性欠如を作りだしていると書かれたが、金を持ち、時には車を持つ青少年は容易に、しつけやお金の不如意な親の統制をすり抜ける時代である。

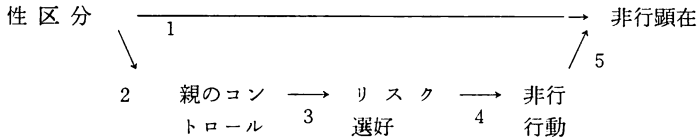
森は青年期危機理論において非行類型を分類し、そのなかで実験と証明型、抗議と自由解放型の2類型に触れ（森1986：46）、非行群として大人先取り群を記述している（森1986：37）。これらがここでいう能動的イメージに合致するかどうかは俄に断定できない。もし危機の克服が環境に主体的に働きかける形でおこなわれるなら、まさしく能動であるが、反動形成的、不満解消的におこなわれるなら、すでに述べたように受動とされるからである。

非行分析において問題は、経済的資源、その他の資源を持とうとする少年の動機である。資源を持つことが直ちに非行に至るとはいえないであろう。

8 パワー関係から非行をみる観点—支配からの離脱としての能動—

フェイガンの、非行のパワー—コントロール理論では、個人的にみて、なぜ女子少年は男子少年に比べて非行を抑制されるのか、なぜ統計上の非行率では女子は低いのかの疑問から出発する。それは、性区分が制度的に確立している社会では、社会での性区分の階層関係と支配—服従の階層関係という2つの関係が家庭に持ちこまれて、娘は息子より強く親の支配、つまり、家族内コントロールを受けるからであるとされる。そこで次のような非行のダイアグラムが提案される（Fagan 1988a：152）。ダイアグラムでは、性区分を

出発点として非行に至る過程が示されるが、従来、女性犯罪の研究では、量的、質的特徴分析とその場限りの原因説明に終わっていたのと対照的に、犯罪学では初めての大胆な理論の提案である。ダイアグラムは、男女の性区分があるがため社会的コントロールが男女間で広く、選択的におこなわれることを示す。



筆者による説明事項

性区分——社会における性区分の制度化を意味する

親のコントロール——娘に厳しく息子に弱い

リスク選好——自由の証拠であり、男子に一層保障される

非行顕在——犯罪の公式統計の示すところである

3-4-5 のルートは社会的コントロールの性区分階層化の結末を示す

図2 性区分階層化と非行顕在を示すパワー-コントロール理論

パワー-コントロール理論でいうパワー関係は社会の性区分や階層分化の形で生きており、このことは、パワー関係が決して偶発的なものではなく、社会的に構造化されていることを示す（パワー構造）。パワー関係は家庭と非行を媒介するものとして重要である（Fagan 1988a : 11）。フェイガンによれば、親が子をコントロールする場合、1、友好親善関係と、2、支配—服従の関係の2種類があるとされる（Fagan 1988a : 153）。前者を関係的コントロールと称し、娘は息子より強く受ける。後者は監督、監視を含む手段的なものである。これも娘の方が強く受けると筆者には読める。

ところで、フェイガンを能動論とするゆえんは、リスク選好の変数を提示している個所にある。彼は、ボーデュア（1961）を参照しながら、パワー-コントロール理論では非行について善か悪かの価値判断をしないと述べ、少年の非行とは女子には減多に許されない痛快であり、さらに続けて、解放の精神、リスクに訴える好機、世の成人男性の、家庭の外での快楽に匹敵するものであると言う。非行がなぜ痛快とみられるか。非行は、女性よりも男性

に一層「門戸開放」されているからなのである (Fagan 1988a : 152-3)。すなわち、フェイガン理論では、非行は、男子が自由であり、解放されている一つの証拠とみられているというのが筆者のフェイガン理解である。

男子はコントロールを受けず、女子は受けるというのが、社会の根底に定着している性区分のなせるわざであると言う。ここで2つの疑問がある。1は、一般にコントロールが弱い場合、なぜ少年は非行に走ることになるか、そこをどう説明するかである。2は非行の質について男女間で違いがあるかである。

1については、非行という行動の動機づけの問題である。周知のように社会構造理論では、社会の構造的欠陥によって少年に蓄積される怒り、達成欲、反抗などを動機と考え、社会的コントロール理論では、人間持ち前の悪への衝動を仮定した。これに対し、パワー・コントロール理論ではリスク承知の、果敢な快楽追求エネルギーを想定する。この種エネルギーは必ずしも違反に結びつくとは思われないが、どういう場合に違反に至るかは、フェイガンは明言していない。この点は後でアグニューの理論化で補足したい。

2については、フェイガンは触れていないようである。とくに強くコントロールを受ける女子の場合、コントロールを打破する類の非行は、男子と同じく、リスク承知の果敢な行動であると考えるか、コントロール過度による抑圧、あるいはフラストレーションから自我を防衛する意味を持つところの、果敢というよりむしろ内攻の行動とみるか、議論が分かれると思う。

9 計算的選択理論—もう1つの資源論—

人間が、環境条件やその場の状況に支配されず、犯罪実行の可否を合理的、主体的に判断できるとする有能さの一つの資源である。それゆえ、能動的人間イメージに合致する。この類の資源論は、資源論として自覚されないまでも、日本や欧米でおこなわれて来た。最近の認知心理学的見地に立てば、人間を情報処理の合理的装置とみる。たとえば、犯罪心理学者、バートルは犯罪者をロボット、条件反射人間とみることなく、能動的課題解決者とみるよ

う提案している。それはその人独自の方法で環境を知覚し、解釈し、反応し、結局彼の持つ多くの反応レパートリーのなかからその時、最も適応的なやり方（つまり、この場合、犯罪行動）に到達したのであるとする（Bartol 1980:86）。近藤、遠藤はこの人間観を非行少年分析に当てはめる。まず、人間を常につじつまの合う、納得できるものを求めようとする合理性を本質的に持っているとする佐伯の見解を引用した後、非行少年においてもみずからのおかれている状況や周囲からの対応を関連づけながら自分なりの納得を求め、その過程で特有の価値態度を形成して来ていると述べる（近藤、遠藤 1988:9）。ただ、少年自身の合理性追求が、周囲との関係でみると、決して合理的とはいえない非行という問題行動に行きつくと続ける。ここでは、1、合理性の仮定が人の態度形成の問題に終わっていて少年の合理的思考と行動決定の過程の分析に進んでいないこと、2、最終的には、非行は合理的ではないとする大人の側の規範的判断が採用されて、世の教育的見解とまぎれてしまっている点が理論としての徹底を欠く。しかし、少年の情緒性、コンプレックス、価値のあいまい性を強調しがちな犯罪心理学の流れのなかでは注目し得る見解である。

欧米の犯罪学でいうと、犯罪者は犯罪の結果の利得とコストとを比較考量して実行への最終的意思決定をするという合理的人間像の世界、計算的選択理論（rational choice theory）の世界である。この種の考え方は非行犯罪の非合理性、無意識動機を扱う深層心理学の見解とは対立するし、あまりにも単純であると批判されるかもしれない。計算的選択の起源は、自由意思が犯罪を選択すると仮定し、選択の要因として功利を唱えたベンサムなどの古典学派にさかのぼる。古典学派の考えは、現代でも新古典学派の形で盛んであり、一般抑止、または、応報の分野でとくに活用されて来たが、非行行動の分析にも適用できるとする（Agnew 1989:99）。

アグニューは人間の自由意思を軸に犯罪理論的思考を3タイプに分けて提出している。自由意思を持たないのは社会構造理論の考え方、自由意思を仮定するのは能動理論であり、中間に漂流理論が来る。以下のような

(Agnew 1989 : 102-3)。

拘束されていること 自由でない	漂流の状態 中間の状態	自由意思を持つこと 創造的である
社会構造理論	漂流理論	資源, または能動理論
社会構造理論が示すように喪失は人を否応なく犯罪に陥らせる。人は環境条件に拘束されたものとしてある。自分の環境に対する能動的支配の感覚が完全に否定される。非行をみずから発明するのではなく、他人からまねる	マッツアのいう柔らかな決定論。人は非行者も含めて自由と統制との中間にある。実証主義を前提に古典学派の考え方を調和さす。非行は一般に気紛れに、間欠的に、一時的におこなわれる。規範意識を中和して犯行に望むか、犯行後、罪悪感を中和して精神の不協和を消す	環境の拘束から解放され、自己指向的であり、合理的である。古典学派の自由意思、アグニューの創造性は同類。自分の環境をみずから支配している感覚を持つ。能動的個人はやむをえず非行をするのではなく、目標達成に最適だから非行に向かう

注 上記の内容はアグニューとマッツアの見解 (Matza 1989 : 38~249~) を用いて筆者が合成したものである。

表1 拘束と自由との関連

自由なる意思は人間の合理性を仮定する。そのとき、非行者はみずからの非行の利害、得失をみずからの頭で、みずからの合理性思考でみずから計算することになる。古典学派は不利益の要素として、刑罰の恐怖をとくに重視したが、現代の計算的選択理論では広範な要素を考える。

現代の計算的選択理論は、クラーク、コーニッシュ、クック、レイノルズなどが1985年から86年にかけて発表したものである (Siegel 1989 : 113)。条件が揃えば、どんな人でも犯罪を選択し、実行するとみるから、社会構造、または、社会階層を考慮しない理論である。その主張するところは古典学派の合理性、自由意思論を受け継ぎ、犯罪は違反行為細目と違反者細目との合成からなるとする。

犯罪実行 = 違反行為細目×違反者細目

違反行為細目には犯罪の利得、発覚検挙のリスク、実行過程の細部テクニッ

ク、対象が犯罪標的になる容易さ、犯罪収獲物の処理方法などがある。非行者はこれらの細目を一つ一つ、自分の頭で自分なりに見積もる。違反者細目は、違反者は犯罪状況の性質、機会、コストと便益などを分析して、自分の動機、ニーズ、他の合法的行為の可能性と照合する。結局、犯罪の可能性を違反行為と違反者という両面から比較判断して実行を決める時、違反は実現する（Siegel 1989：113）。比較判断の場合、計算的選択理論では経済的不利、有利が重視される経済学的理論の色彩が強い。それゆえ、経済的要因が薄い類の非行（たとえば、情緒障害、精神遅滞の非行）の場合はこの理論を適用しにくい。

ところで、計算的選択は比較的短期と長期の選択が区別されると筆者には思われる。短期は犯罪実行直前の利害得失の比較判断である。非行の場合、少年が直前にどの程度自覚的に利害得失を考えるものかについては疑問がある。長期は、非行の生活態勢の利害得失の判断である。この種の判断は前出、少年と警察官との対話の例にみられるように、有能なカウンセラーなら深く聞き出すことが可能である。

10 資源と非行の、包括理論化の試み—アグニューの視点—

マートン、コーエン、ミラー、クロワード・オーリンという社会構造理論の決定論的思考、喪失理論の考え方に対する批判が、資源と非行、能動的非行観のテーマの形で、しかも包括的に理論化されたのは1990年のアグニューの論文である。確かに、前述、カレンらもパワー、アクティブ、リソースの用語を用いたから（Cullen 1985）、この種の考えはアグニューが始めではないであろうが。

アグニューも、社会構造理論や社会的コントロール理論が無力な非行少年を作ったという強い批判から出発する。とくに、マーウェル（1966）の「青少年の無力と非行」が批判の対象となる（Agnew 1990：537）。アグニューによれば、大人は一般に青少年に勢力（パワー）を持つが、多くの青少年は他の青少年に対し、また、時に大人に対して勢力を持つとされる。

彼は能動的非行者の概念を提出する（Agnew1990：549）。まず、資源の所有や使用が青少年に勢力と自立を与える。ここで、勢力とは他の人に影響を与える有能さであり、自立とは他人の影響・支配に抵抗する有能さであると定義しておく。次に勢力と自立が、少年をして内的環境（たとえば、非行になりやすい先有傾向、有能の判断）、外的環境にコントロールを行使させる。このコントロールが能動の核心である。ここで、勢力と自立が非行への傾向を強めたり、有能感覚を増強すると非行に走る蓋然性を高める。アグニューによれば、能動的非行者は勢力と自立のある少年である。

要点は、勢力と自立の少年は内的、外的環境に働きかけ、また、環境から作用を受ける。ここにおいて、自立の少年が非行をするというのは解せないとなるかも知れない。そこで、デュルケムに登場してもらう。彼は、創造的人間の行動がある社会状況下では犯罪と定義されると説いた（Agnew 1989：103）。つまり、犯罪と創造は同根だ。ところが、この彼の考え方はやがて忘れられ、創造については建設的側面のみが取り上げられるようになった。現代、生活世界に規範は満ち、行動は即座に善悪、または合法違法の評価を受ける仕組みである。創造は犯罪にふさわしくないという信念は本能的なまてになる。自立、パワーなども同じであろう。能動―受動を価値判断抜き概念とし、状況と組み合わせると、筆者は次の4個の適応型を考える。

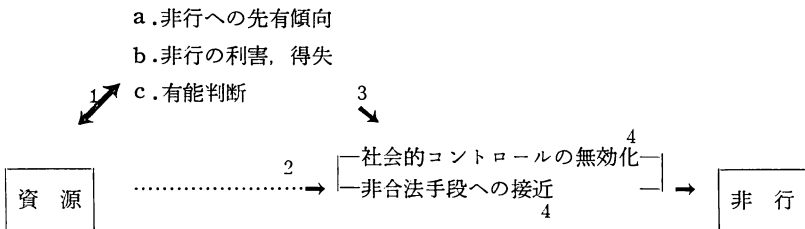
表2 能動性と価値領域から規定される適応型

次 元	定義	価値状況 慣習の状況 合規範的状況	非行・犯罪状況 規範逸脱的状況
能 動	パワーある、自立の、 自己決定の、斬新の	建設的行動 自己成長的行動 斬新的行動	快楽追求行動 リスク承知の行動 計算的選択行動
受 動	依存の、無力の、 決定論的な、 伝統維持の	過剰社会化型行動 刺激反応型行動 旧習墨守型行動	社会構造型非行 社会的コントロール欠 如型非行

能動、受動の運動は状況におかれた時、その状況しだいで、犯罪にも、慣習的行動にもなり得る。ゆえに、能動、あるいは能動を導く資源の所有、使

用はいかにして、いかなる時に非行・犯罪に至るかが定式化されなければならない。資源と非行についてアグニューは次の因果関係ダイアグラムを構想し、3個の第3の変数群を介在させることによって非行に至る道を示したとされる（Agnew 1989: 103）。

図3において、非行への先有傾向とは、青少年の非行に陥りやすさを表わし、その具体的内容は非行的価値観、不良交友、非行への強化、社会的コン



注 1は相互に影響しあう関係。

2, 3は一方向の関係である。

4の個所は筆者の追加による。

図3 資源と非行の因果関係

トロールの水準、緊張圧力などである。非行の利害得失とは、上述の計算的選択理論が主張する状況的非行決定因子である。決定させるのは意思の力であるが、意思の強固とか、薄弱とかの問題ではなく、状況における判断という点が重要である。資源が非行実行に使われないようにするところの、非行は損だ、あるいは便益をもたらさないというコストの判断、逆に、非行に踏み切らせるところの、非行はもうかる、あるいは何らかの課題解決に有利なものであるという利得の判断から成る。そして、有利性の判断の方が優勢であれば、非行へのゴーサインが出る次第である。有能判断とは、目的とされた行為を効果的に達成するのに必要な細部の諸活動の各手筈を組織だて、一つ一つ実行する能力があるという自己判断である。少年は、単なる犯行遂行能力を資源として持っているだけではダメで、それを効果的に使えるとみずから判断することで無力意識を克服することができる。

まとめると、資源は非行を導くが、それは2つの理由が考えられる。1は

社会的コントロールの効力を無にすることにより、2は非行に必要な非合法手段に近づく機会を豊富にすることによるのである。

以上、アグニューの資源論のダイアグラムでは3つの介在変数を置いている。そのなかで、利害得失の計算と有能判断は能動の要素とみられるが、問題は先有傾向であろう。ここには能動の理論が批判する社会構造理論や社会的コントロール理論の諸変数が含まれているらしい。もし、そうであれば、能動の理論は「純粹種」であるより、むしろ、統合理論の一種であるかもしれない。この点は今後の理論的、実証的検討に待つ必要がある。

Ⅱ 若干のリサーチ

11 高校生における非行化の条件としての資源 序

このリサーチの結果について、全般的な報告は科学警察研究所報告防犯少年編、23巻2号（1982）ですで行なった。そのなかの一部を再構成した報告は第13回日本犯罪社会学大会（西村1986）においておこなった。そこでは、市販の高校入試案内書の学力偏差値で高校を上位校と下位校に分類して、生徒の非行実態、意識態度を比較した。その場合の注目点として、従来の社会化の考え方の片面的であることを指摘し、社会化を2種類、つまり1・伝統的な社会規範、価値観の習得・内面化である「伝統的社会化」と、2・今の変動社会の先端部分のライフスタイルとその底に流れる価値意識の受容である「当世風な社会化」に分けて良いのではないかと問題を提起した。当世風な社会化の項目は非行遂行に有効な資源に関わる要素を多く含むので、本稿のための一検討材料としてデータを示したい。

方法

この調査は、都内の私立と都立の高校2年生男女を対象とした。高校の抽出は完全無作為ではなく、入試のための学力偏差値による学校ランキングの資料により対象校を有意に選定して依頼し、応諾した学校を調査対象とした。調査は1981年前半に教室でその学校の教員により質問紙を用いて実施され

た。

質問紙の項目には、生徒の非行状況を知るための非行等の自己チェック項目として23問、家庭、学校、地域などの生活、生活意識などが含まれている。この質問紙は資源の調査をもともと目的としたわけではないが、そのなかから本稿に関連すると思われる回答結果の幾らかを次に示す。表3、4では、上位と下位校の生徒に分け、下位校が生徒の非行率（自己報告による非行率である。最近の非行研究では広く使われている。）で概して高いことを示し、

表3 上位校、下位校別生徒の非行率

非行項目 1-2回、時々する%	男 子		女 子	
	下 位 校	上 位 校	下位校	上位校
1. パチンコをする	72	61	40	26
2. タバコをすう	63	55	41	29
3. 親に隠れて酒、ビールをのむ	60	62	41	44
4. 無免許運転をする	53	34	16	10
5. 禁止の服装髪型で登校する	48	35	59	47
6. ポルノ誌を自販機から購入する	44	37	2.8	1.7
7. 成人映画をみる	36	34	4.6	3.8
8. 授業をさぼる	34	48	32	40
9. 無断外泊する	28	21	15	5.1
10. 親の金を持ちだす	25	21	21	15
11. 遅刻をたびたび、時々する ¹⁾	23	35	25	27
12. 友人をひどくいじめる	23	12	7.5	3.4
13. 車から部品をとる	22	10	3.6	1.9
14. 万引きする	20	16	16	7.0
15. 学校の器物を壊す	19	17	5.6	2.9
16. 道端の自転車を無断乗車する	19	18	3.0	2.7
17. 万引きの品を授受する	18	14	13	3.4
18. 人や生徒を殴って傷を負わす	14	10	1.6	0.8
19. 人や生徒から金品をまきあげる	6.7	3.6	0.8	0.4
20. シンナー、トルエンをすう	5.6	3.4	4.0	0.4
21. 校内で生徒の金品をとる	4.2	5.1	1.0	0.4
22. 親をひどくなくる	3.2	3.2	2.6	1.5
23. 空巢に入る	1.6	1.5	0.4	—

1) 別の個所の質問を転用した

表4 上位校, 下位校別の学校非行度

学校分類		非行度 1)	多い非行などの種類
男子校	上位校	4 点	3. 酒 8. さぼり 11. 遅刻 21. 校内盗 上記以外のすべて
	下位校	19	
女子校	上位校	3	3. 酒 8. さぼり 11. 遅刻 上記以外のすべて
	下位校	20	

1) 非行調査の23項目において, 上位と下位校を比較して%値の多い方の学校を1点と計上した

表5 上位校, 下位校別の資源, 社会化項目に対する反応

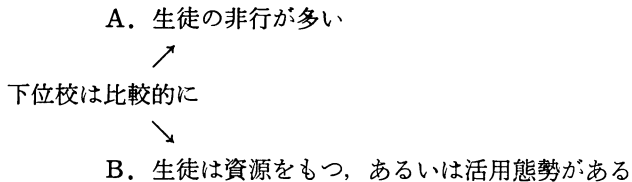
資源に関わる項目	男 子		女 子	
	下位校	上位校	下位校	上位校
1. 自由時間の費消: 車バイクに多くの, やや多くの時間を使う	20	10	5.2	3.0
2. 自由時間の費消: アルバイトに多くの, やや多くの時間を使う	26	8.0	12	9.1
3. 自由時間の費消: 友人と街で遊ぶ	41	27	38	31
4. 自由時間の費消: デートをする	15	11	20	13
5. 暴走族の友人あり	31	13	18	8.4
6. 最近の関心の対象: 車	35	14	4.8	4.0
7. 最近の関心の対象: 服装, 髪型, お金の使い方, 帰宅時間など	22	15	24	19
8. 意識: 自分は大人並である	21	19	7.3	8.0
9. 意識: 普通にやれば何とかなる	38	30	38	32
伝統的社会に関わる項目				
1. 大学, 大学院へ進学希望	34	84	9.7	42
2. 最近の関心の対象: 勉強・成績	24	43	23	48
3. 最近の関心の対象: 生き方・将来	35	44	37	48
4. 朝食抜きで登校する	51	38	51	29
5. スポーツに熱中する友人あり	43	57	42	48

表5では下位校が全体として資源項目において高く, 伝統的社会化項目において低いことを示す。項目は紙幅の関係で若干を選んだ。なお, 男子サンプルでは上位校は10校, 474人, 下位校は9校, 568人, 女子サンプルでは上位校は11校, 525人, 下位校は10校, 504人となっている。

結果と考察

下位校と上位校を2つに分けたといっても中間校は両郡に混入しており、そのため下位校と上位校の分析結果は、差異が大きく出ないかも知れない。それを避けるには中間校を除いて、下位と上位の両極のみを分析対象とするべきである。しかし、そうすると、今回の調査規模ではサンプル数が少なくなり、集計結果が安定しなくなる憾みがある。そのようなわけで中間校を除かずに2分する方法を採用した。下位と上位との間で%値の差の出方が小さい場合でも、もし除けば大きくなるかも知れず、表を読む際、今回の2分法の性質を一応考慮しておきたい。

下位、上位を媒介に資源と非行との関連をみるのは、



という論理に立っている。AとBとの直接の相関を検出したのではないから、関連ありといっても間接的に留まる。表4の非行度分析によれば、下位と上位校との対比は、男子校では19対4、同じく女子校では20対3であり、下位校の非行が優勢であった。

表5の資源に関しては、下位校生は車、アルバイト、デートなどの資源に一層接近しているとみられる。今の時代、車、アルバイト、デートは当世風な社会化の焦点の一部である。それらは当世風な行動的魅力的な性格を持つと同時に、学校の生徒管理上のタブー的なイメージを持つゆえ、青少年にとってダブルシンボルとしての資源と認知されていると言えよう。また、街への外出、暴走族交友からは非行敢行に有効な技術情報、非行許容の態度を学習するだろう。さらに、普通にやっていたら何とかなるという信念態度は、計算的選択の過程で犯罪のコスト要因を減退させ（つまり、捕まっても何とかなるという自我膨張の感覚を基礎づけ）、社会的コントロールの力を弱め

るのに役立つ生活態度である。

12 青少年の万引きに関する計算的選択

序と目的

これは1988年11月に実施した、ある全国的調査のなかの一問として出題された質問の分析結果である（非行原因調査研究会1990）。結果の一部は日本犯罪心理学会第27回大会（西村1989）において発表されたものであるが、今回、女子のデータを加えて検討したい。非行少年のケースワーカーは、非行の原因となる不遇な条件を知ろうとするあまり、利得とコストとを比較判断する少年の心的経済的過程を見落としがちであると思う。

この分析は非行を選択、実行する際、実行を促進するとみられる利得、正當化心理、免責心理、および、実行を抑制するとみられる不利、コスト要因を比較的考量させ、非行実行に踏み切らせるには利得を大きく、コストを低く見積もる計算判断が働くことを証明するのを目的とする。

方法

計算的選択の過程の分析は、第1に、非行の少年に非行時を回想させて犯罪の選択を尋ねる方法がある。これであると、一般少年に対して質問ができないから、比較分析はできない。また、回想は心理的に制約、限定される。第2に、一般と非行の少年共通に仮想の犯行場面の質問を与え、犯罪結果に関し利害得失の比較考量を答えさせるやり方である。これは現実、具体性を欠く一般論的な分析となる憾みがあるが、一般人と非行者とを比較研究できる長所があり、今回の報告は2の方法を採用した。

調査対象は、一般青少年群としては、5県の中学生男子574、同女子560、高校生男子679、同女子640、3都県の大学生男子263、同女子141人である。公式非行群としては、警察に検挙された段階で調査を実施した中学生男子207、同女子110、高校生男子111、同女子42、有職少年男子38、同女子7、無職少年男子34、同女子18人である。そのほか、分析の際のブレイクダウンとして、中学、高校の一般生徒を対象に自己報告非行群を設けた。これは、

警察に検挙されなかったに拘らず、実際は非行をした者も正確に非行群にいられて分析するために考察された調査方法である。非行などの行為をしたことがあったかどうかを質問のなかでみずから答えさせる。回答内容によりいくつかの非行群に分類して分析を進める。今回の調査における手続きは表6の注に示した通りであり、その結果、違反を主とする○群、不良行為のみのあるm群、違反も不良行為も無きに等しいn群の3群を設定した。中学生の男子では、○群189、m群238、n群146であり、同女子では、○群51、m群189、n群320、高校生の男子では、○群247、m群354、n群78、同女子では、○群87、m群326、n群227のような人数となった。今回のように同一の基準で判定すれば、n群は高校生に比べて中学生に多く、また、男子に比べて女子に多い傾向を示すのは、常識的にもうなずけよう。

質問の場面を、「あなたが欲しいものを手に取ってみている内に万引きをしておもうかなと思った時」と設定した。質問文であえて万引きという言葉を用いたのは、生徒に強烈な印象を与えるかもしれない。しかし、気が付いたら、その品物がポケットのなかにあったという設定であると、計算的判断の証明にはなりにくいので、質問文中に万引きという言葉を入れることで自覚的行為のニュアンスを持たせることにした。状況設定に続き、「次のようなことが頭に浮かんでくるか」を聞いた。設問肢は、利得関連、コスト関連、いずれも5個ずつであり、回答は、そう思う、分らない、そう思わないの3段階により求めた。設問肢は表6、7で示した通りである。

結果

まず、対象群別、設問肢別に肯定の回答率（つまり、そう思うと答えた者のパーセント）を表6、7に示す。続いて、表8では10個の回答を尺度点に直し、対象群別に示した。

表6 男子対象群別利害得失の判断結果：肯定回答の%

利害得失	対象群			自己報告 ¹⁾ 中学生			自己報告 ²⁾ 高校生			公式非行の少年			
	中学	高校	大学	o ³⁾	m ⁴⁾	n ⁵⁾	o	m	n	中学	高校	有職	無職
利得の設問肢													
1. 仕切り：万引き1回位で良心はダメにならぬ	13	21	18	21	12	3.4	28	19	12	24	16	21	38
2. 仲間増長：仲間もけっこうやっている	15	27	24	26	14	1.4	42	20	10	37	33	37	59
3. 経済的利得：タダで欲しい物が手に入る	36	47	35	46	33	29	53	47	26	35	36	42	50
4. 逆非難：とられる方も悪い	17	18	11	25	17	5.4	25	16	5.1	24	17	26	32
5. 過小罰：未成年なら大目に見てもらえる	8.4	10	11	15	5.9	3.4	11	9.3	10	15	9.9	16	32
利得の平均%：(b)	17.9	24.6	19.8	26.6	16.4	8.5	31.8	22.3	12.6	27.0	22.4	28.4	42.2
コストの設問肢													
9. 自我の汚染：自分の気持ちを汚す	61	60	76	52	62	70	50	66	69	44	42	53	24
7. 親のコントロール：親に心配をかける	85	84	91	82	86	86	81	87	86	79	90	84	59
8. 人生支障：将来が台無しになる	56	43	50	49	54	70	31	48	58	47	52	40	8.8
9. 監視力：いつも誰かがみている	42	50	58	44	43	38	52	51	36	48	52	55	35
10. 法禁止：法律で禁止されているから悪い	66	55	63	58	67	76	49	56	69	61	69	63	56
コストの平均%：(c)	62.0	58.4	67.6	57.0	62.4	68.0	52.6	61.6	63.6	55.8	61.0	59.0	36.6
相対コスト (c-b) %	44.1	33.8	47.8	30.4	46.0	59.5	20.8	39.3	51.0	28.8	38.6	30.6	-5.6

注 1) 一般中学生徒のなかで、非行の項目の自己チェックにより決められた中学生非行少年

2) 同じようにして決められた高校生非行少年

3) o群は車のチョイ乗り、けんか・暴行、無免許運転、万引き、喝取、薬物吸引の7項目で1個でも過去1年間に経験ある者である。ゆえに不良行為を経験したことのある者もない者も含まれているが、内容としては、他の群と対照して違反行為群とすることができる。

4) m群はoにもnにも該当しない者、内容としては不良行為のみの多くある者である。

5) n群は、全体からo群を抽出した後、不良行為の9項目をまったく無いが、1項目だけありと答えた者である。非・非行等の群とすることができる。

表7 女子対象群別利害得失の判断結果：肯定回答の%

利害得失	対象群			自己報告 ¹⁾ 中学生			自己報告 ²⁾ 高校生			公式非行の少年 ⁶⁾			
	一般青少年			o ³⁾ m ⁴⁾ n ⁵⁾			o m n						
	中学	高校	大学							中学	高校	有職	無職
利得の設問肢													
1. 仕切り：万引き1回位で良心はダメにならぬ	7.1	11	9.2	12	8.5	5.6	21	12	5.7	25	19	43	22
2. 仲間増長：仲間もけっこうやっている	8.0	10	6.4	28	12	2.5	33	9.5	2.6	41	43	57	67
3. 経済的利得：タダで欲しい物が手に入る	25	27	22	35	27	23	46	28	19	35	33	43	39
4. 逆非難：とられる方も悪い	11	7.8	5.0	24	14	8.1	17	7.7	4.4	21	24	29	33
5. 過小罰：未成年なら大目に見てもらえる	5.2	5.2	3.5	9.8	4.8	4.7	8.0	5.2	4.0	18	12	29	28
利得の平均%：(b)	11.3	12.2	9.2	21.8	13.3	8.8	25.0	12.5	7.1	28.0	26.2	40.2	37.8
コストの設問肢													
6. 自我の汚染：自分の気持ちを汚す	69	70	82	45	66	74	56	68	77	22	45	14	28
7. 親のコントロール：親に心配をかける	87	83	86	86	82	89	75	83	86	74	71	71	56
8. 人生支障：将来が台無しになる	59	50	61	51	57	62	32	46	63	29	26	29	22
9. 監視力：いつも誰かがみている	45	51	63	33	48	46	52	51	51	37	45	43	50
10. 法禁止：法律で禁止されているから悪い	69	60	60	51	62	76	44	59	67	42	48	29	56
コストの平均%：(c)	65.8	62.8	70.4	53.2	63.0	69.4	51.8	61.4	68.8	40.8	46.6	37.2	42.4
相対コスト（c-b）%	54.5	50.6	61.2	31.4	49.7	60.6	26.8	48.9	61.7	12.8	20.4	-3.0	4.6

注 1), 2), 3), 4), 5) は表6に同じ

6) 女子の有職少年は7人で極めて少ないが、一応、%を算出した。

表 8 男女対象群別状況の抑制尺度得点

対象群														
尺度点	一般青少年			男 子									公式非行の少年	
	中学	高校	大学	自己報告 ¹⁾ 中学生	o ³⁾	m ⁴⁾	n ⁵⁾	自己報告 ²⁾ 高校生	o	m	n	中学	高校	有職
コスト点(c)	7.7	8.2	8.0	7.9	7.7	7.4	8.6	8.0	7.8	8.1	7.8	8.1	9.1	
利得点(b)	11	11	12	11	11	13	10	11	12	10	11	10	9.2	
状況の抑制尺度 (b－c)	3.7	2.8	3.6	2.8	3.7	5.0	1.8	3.2	4.1	2.0	2.7	2.2	0.1	

対象群														
尺度点	一般青少年			女 子									公式非行の少年	
	中学	高校	大学	自己報告 ¹⁾ 中学生	o ³⁾	m ⁴⁾	n ⁵⁾	自己報告 ²⁾ 高校生	o	m	n	中学	高校	有職
コスト点(c)	7.6	8.0	7.8	8.2	7.8	7.3	8.6	8.0	7.7	8.8	8.3	9.4	9.1	
利得点 (b)	12	12	12	11	11	12	11	12	12	10	10	9.7	9.4	
状況の抑制尺度 (b－c)	4.1	3.9	4.6	2.7	3.5	4.7	2.1	3.9	4.7	1.2	1.7	0.3	0.3	

対象群計															注 1), 2), 3), 4), 5) は表 6に同じ
尺度点	男子	女子	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	総計	3372				
	有職	有職	一般	一般	一般	非行	非行	有職	無職						
	無職	無職	中学	高校	大学	中学	高校								
	無職	無職	中学	高校	大学	中学	高校								
コスト点(c)	8.6	8.8	7.6	8.1	7.9	8.3	8.0	8.7	8.0						
利得点(b)	9.9	8.2	12	11	12	10	10	9.8	11.3						
状況の抑制尺度 (c－b)	1.3	0.8	3.9	3.3	3.9	1.7	2.4	1.1	3.3						

基礎的な結果である表 6， 7 をみるが， その前に， 今回の青少年サンプル
全員の肯定回答の％は， 次のようである。

設問肢	利 得 の 設 問 肢					コ ス ト の 設 問 肢				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全員 3,450	15%	20	34	15	8.9	62%	84	50	49	61
	平均 15.8%					平均 61.1 %				

これをみると、一般に、利得関連の設問には肯定が少なく、コスト関連の設問には肯定が多い。差は3倍強である。これは、非行（ここでは万引き）は、通常、人が実行するのを抑制している逸脱行為であるから当然である。ところで、利得、コストのそれぞれのなかで細かくみると、肯定の程度には違いが認められる。概して肯定の低い利得でも、高い方は3の経済的儲けの判断であり、次には、2の仲間からの強化である。コストの方では、7親から受けているコントロールを破る時の負担を一番強く感じている。次には6自我の汚染、10法の禁止を破る恐れがある。

全体としては以上の傾向を示すなかで、各種の対象群は、利得、コストをいかに考量するかを示したのが表6、7である。利得の設問肢では各群共通に3つの経済的利得を強く出しているが、男女とも非行少年のサンプルでは、仲間ゆえの増長が顕著になる。このことは非行の敢行を促進するよう働く仲間意識の動きと理解されよう。コストの設問肢では、各群は共通に7親にかける心配を最大コストに挙げる。次に挙げるのは、6自我の汚染、10法禁止であるが、自我の汚染というコストは、男女とも、大学生、自己報告n群に比較的高く見積もられ、法禁止は、非行群に比較的高く考慮される傾向がある。検挙されることは、当面、法規範を意識させられることである。

男子と女子とを比較考察する。公式非行の高校生群と有職少年群を除いて、男子は利得を高く見込む。それだけ男子の非行実行確率を高めるであろう。それならば、利得を高く見込むだけ、逆にコストをより低く計算しているかという、公式非行の中学生、高校生、有職少年を除いて、どうもそうではないのである。ここにおいて、男子の一般少年の偶発的非行をゴーサインさせるものは、コスト、すなわち、非行抑制機構の低下ではなく、利得を高く見込む判断であるのではないか。このことは能動論からみた、コントロール理論の批判として特記される。また、男子の少年は警察に検挙される段階になって、コスト計算の頭が働くようになると考えられる。

コストから利得を引いた差を相対コストとして最下欄に掲載した。コストと利得は相反するコンセプトであり、差をとることで純コストを数値化する

趣旨である。利得からコストを引いた相対利得でも何ら差し支えないが、そうすると値がマイナスになるので避けただけである。この相対コストによると、一般には女子が高い（それだけ非行は現実には抑制されていることの意識上での証明）が、無職少年を除く公式非行の各群では、予想に反し、男子が高くなる。このことの理由は、理論的にははっきりしないが、理由の1は、男子少年の警察における警戒心理が、優等生的回答をさせたこと（コストを意味する発言は反省の精神と受け取られるからである）、2は設問肢以外の重大な利得項目（つまり、非行促進条件）が男子には別にあるからであろうか。さらに研究を要する。

次に一般群と非行群との比較に入る。まず男子について考察したい。公式、自己報告のいずれの非行少年とも、利得に関し一般少年より高く見積もる。とくに、無職少年は高い。また、自己報告の非行分類では、中学生、高校生とも、n, m, oの順序で利得を高く見積もる傾向がある。コストに関しては、利得と逆の傾向、すなわち、一般少年の方が高く見込み、また、o, m, nの順序で高くなると期待されるが、その傾向はあるにしても、利得の場合ほど顕著であるとは認められなかった。コストの場合は群間の変動が小さいのである。しかしここでも、無職少年のコスト判断の低さが注目される。無職少年は、男女とも、犯罪を比較的容易に実行する状況判断をしていると認められる。

以上の基礎データを集約して点数化した結果を表8に示す。コスト点は個人の回答を「そう思う」を1点、「分からない」を2点、「そう思わない」を3点としてコストの設問No.6～10の5問を集計したものである。全5問を肯定した場合の5点はコストを最大に見積もったことであるから、非行を大きく抑制する判断の出る可能性を意味し、反対に15点はコストを最小に見積もるから、非行を抑制しないでであろう判断の方向を意味する。各群のサンプルの平均点を計上したのが(c)欄である。肯定を1点、否定を3点に換算しているので、コストを見込むほど点数は低い値をとるようになることに注意を要する。同様にして利得点を(b)として計上した。点は同じく5点か

ら15点の間に分布し、5点は利得を最大に見積もるから、非行を大きく促進させる判断である。15点はその逆に非行を促進させないことを意味する。以上のことを要約し、下に示した。さらに、コストと利得を合算して、状況のなかで個人が非行を敢行する選択の可能性を暗示する測度を考える。そのため、cにマイナスをつけてbと合計することにより測度を作り、これを状況的抑制尺度と名付ける。下に示すようになる。

利得(b):	5	〜	15		
	促進する		促進しない		
コスト(c):	-5	〜	-15		
	抑制する		抑制しない		
状況的抑制尺度:	-10	〜	0	〜	10
	[5+(-15)]			[15+(-5)]	
	促進する			促進しない	
	抑制しない			抑制する	

状況的抑制尺度は-10から10までの間にあり、プラスの数値が大きほど犯罪を抑制する判断が強く、マイナスの絶対値が大きほど促進方向に判断がなされるよう尺度構成された。

この尺度により各群の値を検討する。抑制的判断をもっとも強く出すのは、男子では自己報告中学生のn群、女子では自己報告の中学高校生のn群である。n群のサンプルは、手続きにより一般生徒のなかから非行に無縁なものが抽出されていることを想起してほしい。ところが、n群と比べて、o, m群に分類された生徒は値が小さい、つまり非行が促進される可能性を増していることが分かる。従来の非行研究において非行群の統制群として、一般の生徒群をとることが通例であるが、一般の生徒のなかに抑制度の低いoやm的な者が混入しているのである。そして、それは多人数の平均値をとれば、非行と統制群との差異は出るものの、統制群とした者のなかに非行っぽい人々が混入していることを示す。非行（軽い非行）が一般化している昨今では、このことにもっと敏感になって良いと思われる。

男女の違いについて検討する。官庁の非行統計では、概して女子の非行率は男子より低いのであるから、今回の尺度値においても女子の尺度値が高い、つまり、抑制の判断をしていると予想される。確かに一般の生徒や大学生、自己報告の高校生ではそうであるが、自己報告の中学生、公式非行の無職少年ではほとんど差異がなく、さらに、公式非行の中学生、高校生、有職少年では男子の方が抑制の判断を示した。これらの公式非行少年の男子が抑制的な判断をする理由は、すでに若干考察したが、今後、研究を要する。

一般と非行群との違いについては、当然、予想は非行群の方が、尺度値が低い、つまり、抑制判断が弱いことが予想される。男女とも数値の傾向はそそのようであり、仮説は支持される。自己報告によると非行分類においても違反を主とする○群がもっとも低い値を示した。公式非行群のなかでは、男子では、無職少年が極めて低く、女子では無職と有職少年が非常に低かった。彼等の抑制判断の低さは注目されなければならない。

以上に見るとおり、少年の合理性、ないし、利害得失の計算心理は、一部疑問点があるにしても、非行少年の能動を分析する一つの介在変数として重要である。主体による判断結果が、非行の実行にゴーサインを出すか、赤信号を出すかは問わず、非行の判断過程を分析しようとする立場が非行少年の能動の確認である。

13 結論

非行少年の能動モデルは、必ずしも、非行を有意義な、建設的行為とみたり、非行少年を勇気ある、積極的少年と見たり、また、彼等を注意深く、計画的に実行するプロ犯罪者と見立てたりすることを意味しない。能動という概念は良くも悪くも使い得る価値中立のものである。能動とはマッツアによれば、自己の環境に対する支配の感覚であり、他からのせきたてとか、運命的気分とは反対のものである。さらに、アグニューによれば、個人の内的状態、外的環境に影響され、また、逆に影響を与えるところの相互作用的存在であるとされる。従来の近代実証主義犯罪学の原因論では、ややもすれば埋

もれてしまった意思を救い出す試みである。そうかといって、古典学派の自由意思説に戻ることはない。しかし、現代社会で個人が孤立化、無力化、私化されている、つまり自由喪失状況を抜きにして、非行少年の能動に改めて注目するのは、表層的分析に走る感なしとしない。

能動の観点から非行を考える場合、基本的変数は資源である。資源は、まず、経済的要素が重視される。このことは、非行を説く時、いつも必ず少年や時代の困窮、恵まれぬ状態から出発することに疑問を投げることを意味する。ただし、社会構造決定論の原因論が不要になる時代が来たとは思えない。アグニューに至り、資源は経済的なものばかりでなく、精神的、情動的なものも含む包括的なものとなった。少年が資源を持つ時、彼は勢力と自立を獲得する。これが非行の原動力となると言う。新しく非行理論を作る時、非行のエネルギーはどこから来るかをその理論提案者は理論のなかに定式化しなければならぬからである。この場合、理論的に言って、能動的な少年はますます非行に励み、留まるところを知らなくなるのか、どうか。能動と受動の少年との間で、再非行や、その後の犯罪人生の展開に違いがあるか、どうか、さらにリサーチが求められる。受動的な非行少年の非行防止は社会や地域環境をよくすることであるとすると、能動的な非行少年の非行防止は少年のセルフコントロールによる復元力を強めること、資源利用の方向転換である。しかし、いずれも完全な防止策は容易とは思えないが、まったく諦める必要もないのである。非行研究は若干の知識を蓄積している。

非行の少年の更生指導では、重要なこととして少年の自己成長や自立が図られる。このような場合、少年は非行時はダメな少年で、非行後は、指導により一挙に自立的、能動の人間になると考えるのだろうか。それは考えにくいのではないだろうか。比喩的にいえば、少年に衣服のボタンの掛け間違いはあるにしても、始めからボタンが無いと言い切れるかどうか。掛け間違いと言うことは、非行のなかに、すでに資源をいかほどか秘めており、ダメな少年と見ないことを承認することである。

更生指導において男性の能動と女性の能動は区別されるか、どうか。能動

は男性のイメージで、受動は女性の役割であるという保守的通念はあったし、現に無くなったとはいえない。そういう社会体制下で欧米の社会学的犯罪理論では、男子の暴力的非行の動機として男性らしさの不安と、その克服という心理的メカニズムが指摘されてきた。女性支配の家庭において息子が男らしさを獲得できないでおり、その補償として家庭の外で男らしく振る舞った結果が不幸にして暴力であったと説明する。日本では、街での少年の暴力非行そのものは少ないので、あまり表立って議論にはならないが、母親が強く、父親が弱い家庭に家庭内暴力がおきやすいと識者は指摘しているから、息子たちに潜在化する男性らしさ渴望の心理は日本にも当てはまるかも知れない。もしこれがあり得るとすると、中学校において、女性教員が強い学校は、男性教員が強い学校より校内暴力事件が多発するはずである。が、この種のリサーチの発表はないようで、ぜひ実証データが望まれる。

女性（母親）支配の家庭が家庭内暴力発生の基盤であるという理解の一方、筆者の見解では、これが日本の少年非行が国際的に低い理由にもなる。女性支配の家庭環境のなかで息子は女性化し、攻撃的でなくなるから、男子の非行は（財産犯、身体犯などの多くの非行は攻撃性を基本にする）減少する。非行防止は女性支配の家庭実現による男性の女性化（優しい男性化）であることになる。では、家庭の女性化が進めば、終には非行が無くなると期待さ

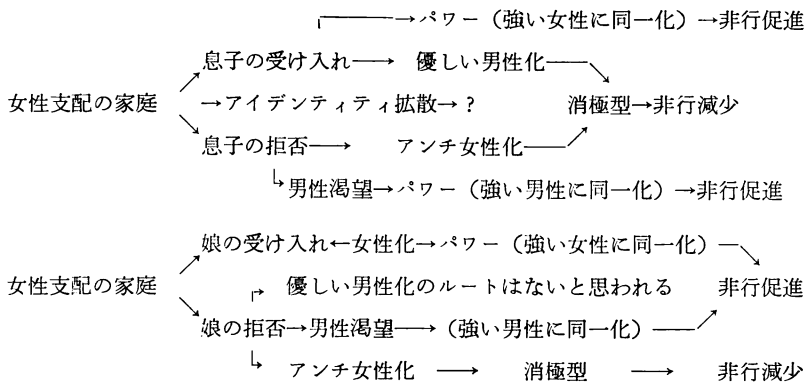


図4 家庭の女性支配と非行との関連

れるだろうか。現にそういう非行防止論が欧米にはある。その間を整理すると図4になる。女性役割をどのように規定するかにより道は分かれる。

ここで問題は女性化、男性化という場合、両性の性役割を積極ととらえるか、消極ととらえるかであろう。また、家庭の性区分は社会の性区分と別個には存在しない。女性化について言えば、息子や娘が「女性はもっと男性らしく行動的であるべきだ」という主張に合わせるなら、女性化は非行率の増大を結果する。「女性は男性と違い優しくあるべきだ」という保守的主張（消極型の女性役割）に合わせるなら、女性化は必ずしも非行の増大を招かない。日本の現状はまだこのような状態ではないか。ゆえに男性の女性化は、家庭の外で男性を非攻撃的、つまり、優しくするのである。しかし、女性がもっと強くなった暁には、男性の女性化がストレートに非行減少を結果しないのではないかと思われる。これに対し、女性の女性化は、当分は強い女性を目指すから、女子（娘）の非行率の増大につながるであろう。しかし、強さが男性と平衡点に達すれば、状況は変化する。それ以上に非行が増大するとは考えにくい。

資源と非行に関し、その因果はどう関係づけられるか。資源が先か、非行が先であろうか。この関係は次の型が考えられる。

1. 資源獲得・所有→前非行→非行
2. 前非行↔資源獲得・所有→非行
3. 前非行→非行↔資源獲得・所有

1の型がもっとも素朴にして明解な型である。しかし、そう簡単に断定できないところに資源論の弱さがある。しかし、日常の観察では非行的生活をしているうちに資源を得、資源を得たことがさらに非行に深入りさせることがあるのではないだろうか。時間的後先、原因と結果の関係は、長期（少なくとも5年以上）にわたり同一集団を追跡研究することにより明らかになる。資源に関わるこの種のデータは今のところ見当たらない。このように考えると、能動論にしろ、日本の犯罪原因論にしろ、長期研究を地道におこなう国民的合意を得ることが大いに望まれるのである。

引用, 参考文献

Agnew, R.

- 1989 Delinquency as a creative enterprise : A review of current evidence. *Criminal Justice and Behavior* 16:98-113.

Agnew, R.

- 1990 Adolescent resources and delinquency. *Criminology*. 28 : 535-66

Bartol, C. R.

- 1980 *Criminal Behavior*. Englewood Cliffs : Prentice-Hall

Bordua, D. J.

- 1961 Delinquent subculture : Sociological interpretation of gang delinquency. *Annals of American Academy of Political and Social Science*. 338 (November) 119-36.

Braithwaite, J.

- 1981 The myth of social class and criminality reconsidered. *American Sociological Review*. 46 (February) 36-57.

Clarke, R. and D. B. Cornish

- 1985 Modeling offenders' decisions : A framework for research and policy. In M. Tonry and N. Morris (eds.) *Crime and Justice* Vol. 6. Chicago : University of Chicago Press.

Cloward, R. A.

- 1959 Illegitimate means, anomie and deviant behavior. *American Sociological Review* 24 (April) 164-76

Cloward, R. A. and L. Ohlin

- 1960 *Delinquency and Opportunity*. New York : Free Press.

Cohen, A.

- 1965 *Delinquent Boys*. New York : Free Press.

Cook, P.

- 1985 The demand and supply of criminal opportunities. In M. Tonry and N. Morris (eds.) *Crime and Justice* No. 5. Chicago : University of Chicago Press.

Cornish, D. B. and R. V. Clarke

- 1986 *The Reasoning Criminal : Rational Choice Perspectives on Offending*. New York : Springer-Verlag.

Crowley, J. E.

- 1981 Delinquency and employment : Substitutions or spurious as-

sociation. Paper resented at the annual meeting of the American Society of Criminology

Cullen, F. T.

- 1988 Were Cloward and Ohlin strain theorists ? Delinquency and opportunity revisited. *Journal of Research in Crime and Delinquency* 25 : 214-41.

Cullen, F. T., M. T. Larson, and R. A. Mathers

- 1985 Having money and delinquency invloement : The neglect of power in delinquency theory. *Criminal Justice and Behavior* 12 : 171-92.

Etzioni, A.

- 1970 Power as a societal force. In M. E. Olsen(ed.), *Power in Societies*. New York : Macmillan.

Hagan, J.

- 1989 *Structural Criminology*. New Brunswick : Rutgers University Press.

Hagan, J., S. H. Simpson and A. R. Gillis

- 1979 Sexual stratification of social control : A gender-based perspective on crime and delinquency. *British Journal of Criminology* 30 : 25-38

非行原因調査研究会

- 1982 不良行為少年の実態と対策に関する調査（青少年問題調査研究報告書）。
総理府青少年対策本部

非行原因調査研究会

- 1990 非行原因に関する総合的調査研究（第2回）報告書。総理府青少年対策本部

平尾靖

- 1979 非行心理の探求。東京：大成出版

Hirschi, T.

- 1969 *Causes of Delinquency*. Berkley : University of California Press

近藤日出夫, 遠藤隆行

- 1988 非行少年における性格特性と態度との関連。犯罪心理学研究 26 : 1-11.

Marwell, G.

- 1966 Adolescent powerlessness and delinquent behavior. *Social*

Problems 14 : 35-47

Matza, D.

1988 漂流する少年—現代の少年非行論—, 第2刷 東京: 成文堂

Merton, R. K.

1938 Social structure and anomie. American Sociological Review
3 (October) 672-82.

箕浦康子

1971 社会変動と明るい非行少年の増加について. 臨床心理学研究 9 : 223-8

箕浦康子, 武田由美子

1972 ハンドテスト解釈仮説の再検討. 犯罪心理学研究 9 : 38-45

森武夫

1978 犯罪心理学入門. 東京: 大成出版

森武夫

1986 少年非行の研究. 東京: 一粒社

西村春夫

1986 原因論なき時代—統制理論の現代—, 第13回日本犯罪学会発表 報告要
旨 30-31.

西村春夫

1989 a 少年非行の変遷—その光と影—. 西村春夫編代表 1975~1988 少年非
—その実態・原因・対応の分析. 東京: ソフトサイエンス社1-16 所収

西村春夫

1989 b 非行抑制に対する社会的コントロール, 内在的コントロール, 環境設計
の諸要因の比較考量. 日本犯罪心理学会第27回大会発表, 犯罪心理学研究
27巻特別号 40-41.

Richards, P., R. A. Berk and B. Forster

1979 Delinquency as Play: Delinquency in a Middle Class Su-
burb. Cambridge : Ballinger.

Rogers, J. W. and M. D. Buffalo

1974 Fighting back: Nine modes of adaptation to a deviant label
Social Problem 22 : 101-18

沢田豊

1986 成人初入犯罪者の犯罪行為の意味. 日本犯罪心理学会第24回大会発表
犯罪心理学研究 24巻特別号 136-7

Shannon, L. W.

1982 Assessing the Relationship of Adult Criminal Careers to

Juvenile Careers : A Summary. Washington : Department of Justice.

Siegel, L. J.

1989 Criminology. St. Paul : West

Sykes, G. M. and D. Matza

1957 Techniques of neutralization : A theory of delinquency. American Sociological Review 22 (December) 664-70.

Thrasher, F. M.

1927 The Gang. Chicago : University of Chicago Press.

Toby, J.

1969 Affluence and adolescent crime. In D. R. Cressy and D. A. Ward (eds.) Delinquency, Crime and Social Process. New York : Harper and Row.

Toby, J.

1974 The socialization and control of deviant motivation. In D. Glaser (ed.) Handbook of Criminology. Chicago : Rand McNally 85-100.

Wilkinson, K.

1974 The broken family and juvenile delinquency : Scientific explanation or ideology. Social Problems 21 : 726-39.

Wrong, D.

1961 The oversocialized view of man. American Sociological Review 26 (April) 183-93